

星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.15 104～105（2019）

書 評

『ドキュメント ひとりが要介護になるとき。』
（山口道宏編著 現代書館）

手 島 純

山口道宏編著『ドキュメント ひとりが要介護になるとき。』は、私にとって時宜に合った1冊であった。私事で恐縮だが、私の母はひとりで「要介護の生活」をしているからだ。

数年前までは元気に歩き回り、ひとり暮らしを楽しんでいたのだが、指を骨折し1か月ほど入院してからはどうも様子がおかしくなってきた。認知症も少々あって、家がどんどん汚くなる。掃除ができていないのだ。その上、うまく歩けなくなってしまった。医者からの紹介もあり、介護度認定の後、ヘルパーが来ることになった。

このまま症状が進むとどうなるのだろうと、私は介護関係資料を取り寄せ調べはじめた。なかなか複雑な仕組みだなというのが率直な感想である。施設もいろいろあることが分かった。特別養護老人ホームに入るには要介護3以上ということもはじめて知った。

調べていくと、結局お金がないと大変だということだ。お金があれば施設の選択肢も増える。日本という国は順調にいったらいいが、一度コースを外せば困難さが纏いつくのである。それは教育もそうだが、福祉も同じようだ。

本書を読み通すと、かなり悲しい気持ちになる。著者たちによって、単身での生活を余儀なくされたときに起きるさまざまな問題が炙り出されるが、それぞれに家族、地域、介護施策の厳しい現実が横たわっている。介護の未来は大いに気になるところだ。

ここで本書を章ごとに概観しつつ、私の意見も絡ませていきたい。

第一章の「単身で老いるときに」では、家族の在り方が狙上に乗る。「少子高齢化と単身化の進行は我が国の世帯の縮小化を加速し、身近にも『サザエさん』のような三世同居の家族構成はめっきり減って」いったと「サザエさん」が例に出る。それは単なるノスタルジーではなく、介護というクライテリアで家族を見ると、家族構成の変化に触れないわけにはいかないからだ。確かに事態は単身化に向けて進行する。家族の在り方と介護は不可分な関係にあり、まさに本書タイトルの問題提起は他人ごとではなくなるのである。

第二章「孤立しない、孤立させない」では、ひとりということが単に身体的な孤立ではなく、IT活用の問題も含め、情報からの孤立も含まれていることが分かる。「福祉サービスでいうところの『網の目』とは何か。『網』の目は粗くないか、『網』は破れていないか、そこからポロリと大切なものが落ちていないのか」との指摘は傾聴に値する。

第三章「いかに『要介護者』を少なくするか」では「『要支援』よりも前段階から、自治体等が高齢者とコンタクトを取り必要な支援をする。次に介護が必要になったら介護保険につなぎ、自宅での生活が困難になったときに自らの意思で老人介護施設に入居という『選択』も可能といった、そんなシステムの用意が待たれる」とある。確かにそうである。しかし、

星槎大学共生科学部

自治体は実際には何かないと積極的にはコンタクトを取らないだろう。自治体のサポートは必要だが、高齢者を取り巻く環境、つまり地域の力も必要だと思う。特に身寄りのない者にとっては、地域社会の在り方は重要である。当然、介護が必要なら介護保険につなぐべきだろうし、自らの意志で施設に入居できる選択があるといい。しかし現実には、「選択」ではなく「強制」になるのは個人の資産次第だ。理想を現実化するための政策はあまり期待できないのではないだろうか。なぜなら、国の基本政策は、教育もそして福祉も新自由主義的な政策だからだ。「自己責任」と「自立支援」が同じように聞こえてしまう。

第四章「単身化と在宅と地域包括ケアシステムと」では地域包括ケアシステムの全体像だけでなく、介護の在り方の全体像が書かれていて非常に有用であった。低賃金の介護職、地域間格差の問題、サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）の危うさ、介護医療院の内幕などが取り上げられていて興味を引く。なかでも富山市で「赤ちゃんからお年寄りまで障害の有無にかかわらず一つ屋根の下で過ごせる共生型デイサービス施設が設立された」というのは知らなかった。これは今後の介護の在り方が「共生社会」と連結する意味でも注目すべき取り組みだと思う。

第五章は鼎談である。医師・教員・ケアマネージャーが第四章までの議論をまとめ、さらに問題提起もする。「わが国では高齢化がイコール貧困化であることは、相対的貧困率が高齢化に伴って急激に上昇していくことでも証明されます」「夫婦二人暮らしも、言ってみればひとり暮らし予備軍です」「特別養護老人ホームでも、本人の希望で入ったという方は1~2%しかいません」「介護職の給料が10万円アップすれば日本はガラリと変わるでしょう」等々。

そうか、そんな現実なんだよねと、再確認する。理念だけで「ヒト・モノ・カネ」なしでは上手くいかないと思う。

本書の「おわりに」のなかで「『在宅』の本音では『うちにいたい』と『うちにいるしかない』がある」と書かれている。同じ在宅という状態でもその中身はかなり違う。その違いに目を向けない介護施策の在り方は、当事者にとって好ましいものではないのである。

繰り返すが、福祉の現場にも新自由主義的な政策が目立ってきたことだ。「自立支援」という言葉も、要するに福祉にはそんなにお金をかけられないので、自分のことは自分でやってよということに他ならない。ここでは紙幅の関係で詳しくは述べられないが、教育の場も同じである。「自己責任」や「自業自得」という言説が飛び交い、セーフティネットとしての教育の在り方が喪失している。福祉と教育を疎かにして、総活躍社会などあるのだろうかとしみじみ思う。

母親の介護を通して、介護の現実に触れ、また介護の問題点も認識しはじめた。だれでも介護を受ける可能性があるわけだから無関心ではいられないはずだ。しかし、巷に氾濫する介護についての言説は、複雑に入り組んだ制度のことやお金のことばかりで、介護という問題が炙り出す社会の矛盾が見えて来ない。

介護の問題を考えると、現実的なノウハウだけではなく、背景にあることも含めて考える方が、実は施設選びにも役に立つ。本書はそうした意味で、現実の介護にかかわるトリセツであるとともに、介護全体を俯瞰する概論にもなっている。介護に関しては、全体像を把握することがいかに大切かを本書によって教えてもらった。